

患者が専門誌に投稿

抗がん剤の比較実験めぐり

乳がん患者らでつくる市民グループ「イデアフォー」(東京都豊島区、会員五百五十人)は英国の医学誌「ランセット」に、日本で行われている抗がん剤の比較実験を「科学的根拠がない」と批判する主張を投稿、先月二十日号に掲載された。臨床試験を進める医師側の反論もあり、日本で続く論争を、海外に紹介する形となっている。

厚生省の研究班の「乳がん術後補助療法研究委員会」は、経口抗がん剤「UFT」の乳がん再発予防効果を検証する臨床試験を進めている。

乳がん手術をした患者を二つのグループに分け、一方には日本でよく使われているUFTを使い、もう一方には、欧米で普及している三種類の注射薬を併用する「CMF療法」を行うものだ。

イデアフォーの投稿は、CMF療法はすでに延命効果が証明され、世界的標準治療となっているのに対

し、UFTは有効性について十分なデータがないと主張している。しかも、患者への説明同意文書にはこれらのことが書かれておらず、UFTを飲む患者は不利益をこうむる可能性があるとして、倫理的にも問題がある臨床試験の停止を訴えている。

これに対し、研究班の渡辺亨委員長(国立がんセンター中央病院内科医長)は「UFTは副作用が少なく、転移性の乳がんへの投与で比べると、CMFと同等とのデータもある。だからこそ有効性を検証する今回の臨床試験は欠かせない」との反論を寄せている。

イデアフォーは乳がん治療の体験から、インフォームド・コンセントの普及や徹底を図る活動をしている。投稿した青木栄子さんは「日本の医療を患者本位のものに変えようと、市民が積極的に活動していることを、海外に知ってもらいたかった」と話している。